

さくら川吟行

一色千代子

五月晴れの連休も了ろうとする日の午後。家の仕事も片付き、ひと休みの時に、ふと「桜川のスケッチ」の約束を果たそうかと思ひ立ち、着慣れぬスラックスにズック靴という出立ちで、身も心も軽々と家を出ました。

山の手へ住いを移してから十年余り桜川に、ごぶさたして、現在の川はどう変っていることか、幼なとき馴れ親しんだ川の景色は失われているのではないかという不安と、久方ぶりにまみ得る期待に土浦駅より歩を進め、線路添いの道を堤へ出ました。川はありました。昔日の如く桜川は流れていました。

緑風に 真菰波なす さくら川。

桜の古木は土手の改修のため切られて堤の片側に若木が植えられていました。

ボート出で 岸に釣人 緑満つ

旧作に

夜桜に 舟行くらしも 櫂の音
花妖し ぼんぼりに散る 大樹かな。

花時には、ふたゝび昔のように人で賑うようになりませう。桜川橋、匂橋もコンクリートに、排水機小屋も鉄筋の建築となっていました。川の流れば変わらず、何艘もの釣舟が。岸には、

夫や釣 妻は絵筆に 霞雀

ピーチ傘 川原に父子の タナゴ釣

「釣れますか」と釣人に声をかけ、キャンパスに筆をはこぶ婦人の傍に佇み、道草をしながら銭亀橋へ。道祖神へ。

道祖神 詣でし苑に 五月咲く。

葉桜の 影や明治の 碑に淡く。

旅人の守神として今猶信仰され、社も苑も小規模ながら手入れが行届いて、苑内は明治四十三年建立の桜樹二百